令和５年度　高校一般入学試験

進学コース

国語（50 分／100 点満点）

≪受験上の注意点≫

１．監督の先生の指示があるまで，試験問題に手を触れないでください。

２．問題冊子は 11 ページ，解答用紙は 2 枚あります。

３．解答はすべて解答用紙に記入してください。

４．問題冊子・解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。

５．問題冊子・解答用紙の回収については監督の先生の指示に従ってください。

受験番号	
氏　　名	

Kyoei　京都共栄学園高等学校

［一］ 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（出題に際し、省略した箇所があります） （70点）

もしも人生の意味を考えることがあるとすれば、何らかの意味での挫折を経験した時だろう。自分の勤めていた会社がなくなるとか、健康に自信があった人がA ケンシンを受けた時に癌（がん）であることがわかったというような時である。好意を寄せていた人に冷たくあしらわれたというような時に思いB ツめる人もいる。

しかし、幸か不幸か、このようなことをまったく経験しない人もいる。そのような人でも、やがて年老い、近づく死のことを考えて不安になることはあるだろう。だが、いつまでも自分は若いと思い、身体が弱ればその時はさっさと死ぬなどとC イサましいことをいう人もいる。実際にそうなった時に、元気だった時と同じことがいえるかははなはだ疑問であるが。

A 身 B 世という言葉は今の時代は死語なのかもしれない。たとえそのようなことを願っていても、大企業であってもD ツブれる時代なのだから、たとえよい学校に入り、よい会社に入っても幸福な人生を送れるかどうかはわからない。

それでも時代の変化に気づかず、あるいは、気づかないふりをして、今もなお、少なくとも自分だけは幸福になれると思い、いよいよI 競争に勝ち抜くことで幸福をつかみ取ろうとする人もいる。そのような人にとっては、よい学校、よい会社＝幸福という図式がE クズれた今の時代状況は、幸福をF ハむ要因以外の何ものでもない。

成功することが、幸福に生きることを保証してくれるわけではない。この場合の成功とは有名大学に進学し、一流企業に就職するというようなことだろうが、そのような人は子どもの頃から、まわりの大人にII 成功することが大切だと吹き込まれている。

家族や親戚に成功した人がいれば、そんな人になれといわれる。かくて、①何かに「なる」ことが大切なことだと思ってしまう。今「ある」ところにいてはいけなくて、どこかに向かっていかなければならない。当然、III 後ろに退くことなどあってはならない。三木清は、成功は進歩に関係するといってい

る（『人生論ノート』）。かつての右肩上がりの経済成長率のグラフが連想されるところである。

三木は、成功は「過程」に関わるが、それに対して、幸福には、本来、進歩というものはなく、「幸福は存在に関わる」といっている。何も達成していなくても、何も所有していなくても、成功しなくても、人は幸福になることができるのだ。

より正確にいえば、成功しなくても幸福に「なる」のではない。幸福で「ある」のである。それが「幸福は存在に関わる」ということである。

②成功／不成功と幸福／不幸を同一視している人は、成功しなければ幸福になれないと思っている。しかし、今日では、③成功したからといって、そのことがかえって人を不幸にするケースが頻(しき)りに報道されている。それでも、Ⅳ成功を目指すことを完全に断念する人は少ない。高学歴で一流といわれる企業に就職しても、過労死しかねない労働を強いられるようなことがあることを聞かされていても、そして、そのような生活が幸福には結びつかないことを知っていても、自分に限ってそんなことにはならないと思う。実際、多くの人は昇進し、経済的に報われる生活をしているのだから、自分もそのような生活を送れるに違いない、そう思いたいのだ。

成功することが幸福であると考える人とは違って、生活の中でのささやかな満足にこそ幸福は見出せると考える人がいる。仕事から疲れて帰ってきた時、子どもの寝顔を見ること。家族が一堂に［C］して食事すること。そんなことは昇進することに比べたら取るに足らないことのように見えるが、日常の些細(ささい)な瞬間に幸福を感じられる人は、職場での昇進には執着しない。

子どもの頃、私は④父の生き方が少しも理解できなかった。だが、今になって振り返ると、父が夕食時に必ず帰ってきていたのは、早くから昇進を諦(あきら)めていたからだろうと思う。父が無能だったのではなく、家庭での幸福にこそ満足を求めていたのである。

父のような生き方を選ぶ人は知っている、家庭での幸福こそが何にも代えがたいことであり、日常生活でささやかな幸福を感じられる瞬間を持てることは、人類の偉業と並ぶほどの奇蹟(きせき)といってよい出来事なのだということを。（中略）

三木清によれば、幸福は質的なものであり、成功は量的なものである。

お金を得ることや出世するというようなことであれば、イメージするのはたやすい。ところが、幸福は質的なものであり、しかもその幸福は「各人においてオリジナルなもの」なので、他者には理解されないことがある。成功が一般的であるとすれば、幸福は個別的である。

量的なもの、一般的なものと考えられる成功は誰にでも手に入れられるように思われるので、嫉妬の対象となりうる。他方、幸福は質的であり、個別的、各人のものなので、他者からの嫉妬の対象にはなりにくい。三木は次のようにいっている。

⑤「純粋な幸福は各人においてオリジナルなものである。しかし成功はそうではない。エピゴーネントゥム（追随者風）は多くの場合成功主義と結び附いている」（『人生論ノート』）

これはトルストイの『アンナ・カレーニナ』の冒頭に、「すべての幸福な家庭は互いに似ている。不幸な家庭はそれぞれの仕方で不幸である」といわれているのとはちょうど逆の言い方である。

トルストイは、幸福と不幸を対比しているが、三木は幸福と成功を対比している。トルストイの言葉を借りるならば、「すべての成功者は互いに似ている。幸福な人はそれぞれの仕方で幸福である」といえるだろう。互いに似ているからこそ、模倣され追随されるのだ。

それでは量的なことであれば、必ず嫉妬の対象になるかといえばそうではない。百メートルを走るのに十秒を切る人がいても、そのような人を嫉妬する人はほとんどいない。決して自分の手に届く記録ではないことを知っているからだ。

他者の美を妬（ねた）む人はいる。他者の美を［ｉ］なものと考えているからである。美を量的に捉えている限り、自分にも勝てるのではないかと思う。しかし、実際には他者の美に到底追随できないとわかれば嫉妬しなくなる。つまり、美が［2］な差異であると知れば嫉妬しようとは思わないし、勝とうとも思わなくなる。化粧や整形ではどうすることもできない美は追随しようがないからである。

その際、自分は他者の美に敵（かな）わないと思う必要はない。他者と自分の美は［3］に異なり、比べることができない、そう見ればいいのである。もちろん、自分の［4］な美も他者から追随されることはない。

（岸見一郎『幸福の哲学』）

問一　═══線部A～Fのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　空欄A・Bをそれぞれ漢字一字で埋め、四字熟語を完成させなさい。

問三　空欄Cを漢字一字で埋め、「一堂に[C]して」という慣用句を完成させなさい。

問四　～～～～線部Ⅰ～Ⅳのうち、――――線部①「何かに『なる』こと」と、本文において同じような内容のものにはA、対比されている内容のものにはBと書きなさい。

問五　――――線部②「成功／不成功と幸福／不幸を同一視している」とはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　成功すれば幸福だとみなし、成功しなければ不幸だとみなすこと。

イ　成功には不成功が対比され、幸福には不幸が対比されること。

ウ　成功と不成功はセットであり、幸福と不幸もセットであること。

エ　成功するかどうかは幸福かどうかにかかっていること。

問六　――線部③「成功したからといって、そのことがかえって人を不幸にするケース」とありますが、そのようなケースに該当するケースを本文中の語句を用いて、三十一字以上三十五字以内で述べなさい。

問七　――線部④「父の生き方」とはどのような生き方か。本文中の語句を用いて、三十五字以内で述べなさい。

問八　――線部⑤「純粋な幸福は各人においてオリジナルなものである。しかし成功はそうではない。エピゴーネントゥム（追随者風）は多くの場合成功主義と結び附いている」をわかりやすく言い換えた箇所を本文中から三十五字以内で抜き出し、最初と最後の五文字を書きなさい。

問九　空欄1～4には「量的」か「質的」が入ります。それぞれ適当なものを書きなさい。

［二］　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（出題に際し、省略した箇所があります）　（30点）

なんの因果か、写真について書き始めてから二十年あまりが経つ。しかし、続ければ続けるほど、おぼつかない。写真について書くとはどういうことなのか、ますますよくわからなくなってきた。何十年も同じことを続ければ、その本質なり真髄なりを知ったような顔ができるものかと想像していたが、とんだ思い違いだったらしい。

だから①初めて会った人にどんな仕事をしているのかと尋ねられるたびに、いまだに口ごもってしまう。仕方なしに、写真について文章を書いたりしています、と答える。すると相手の笑みのなかに一瞬、不意を突かれたような影がよぎる。写真という親しげな言葉で油断させておきながら、それについて書くなどと素っ頓狂なことを言い出す自分は、もしかするとずいぶん訝（いぶか）しい＊一人間なのかもしれない。

しだいに申し訳なさがつのり、写真を撮るほうではなくて研究するほうなんです、と慌ててつけ足すと、②相手の表情がいくぶん緩む。書くと言うだけでは怪しすぎるが、研究と呼べばせめて理解可能ということか。それでもやはり半分くらいの人にはなかなか想像しづらいようで、そうですか、と頷（うなず）いた後、それでどういう写真を撮るんですか、などと尋ねてきたりもする。どうやら人は、写真が撮られるものでないと気がすまないらしい。

しかしほんとうのことを言えば、私は研究者であるとも言いがたい。学問的な知の革新を志して膨大な資料を読み込み、いかなる労苦も厭（いと）わずに論文を書き、その探究のためなら日々の生活を犠牲にすることも厭わない――幼い頃からそのような父親の背中を見つづけ、研究者と言われる人たちの静かに狂気じみた姿が身近にあったせいか、私は自分に彼らほど尋常ならざる学問への執着も、樹海のごとき知の密林へ分け入る才覚も十分にないということを早々に知っていた。

そうであってもなお、沼に足を取られるようにして、どうしようもなく何かにとらわれてしまうということはある。私にとって、それは写真を見ることだった。十代の頃に何気なく写真で遊び始めたものの、次第にカメラという機械が生み出すイメージを前にして、どう見たらよいのかと途方に

暮れるようになった。絵画や彫刻のようなボリュームもなく、いくらでも複製でき、ぺらぺらとしていて簡単に破れてしまうもの。安価でどこにでもあるものでありながら、ときに誰かの心を大きく震わせ、ときには奪ってしまうもの。いざつかもうとすると指の間をするりと抜けるようなその捉えがたさが、私をひどく苛立たせた。

あいにく美術全集や画集は、その謎を解く手がかりにはならなかった。絵画を見ることと写真を見ることは、決定的になにかが違うと気付くのに、さほど時間はかからなかった。写真において、作り手と作られたものはお互いに関係をもちながらふつりと切り離されていて、その切り離された場所にはまったく人の気配がない。ところが写真に関する書籍や雑誌をいくら漁っても、いかに撮影するかという技術的な側面や作品を紹介するばかりで、目の前にある写真をどう見たらよいのかという素朴な疑問に対する答えは見つからなかった。私は困り果て、ただ人の気配のない場所にじっと目を凝らしては、ひとりため息ばかりついていた。

書きたい、と思うようになったのが、正確にいつだったかは覚えていない。しかし写真について自分で書くしかないという思いと、どう書けばよいのかという迷いとの間で踏ん切りがつかずにいるうちに、ある編集者と出会った。一年ほど経って、けっして首を縦に振ろうとしない私を見かねたのか、彼は言った。④私はもうすぐ辞めるから、その前に書きなさい。私はようやく、恐る恐る書き始めた。編集者が辞めたのは、それから十年あまり後のことだった。

写真について書かれた文章にはすでにさまざまなものがあった。写真家のストーリーを紹介するもの。被写体となった人や場所について解説するもの。写真家と被写体の具体的な関わり方をたどるもの。その表現としての新しさや歴史的価値を論じるもの。さらには写真というメディアそのものの社会的・美学的機能を分析するもの。写真について書くということは、こうしたアプローチのなかからいくつかを選んだり組み合わせたりしてそれを掘り下げることなのかと思い、意識的に試したこともあった。しかしなぜか、そうやって自分が書いたものには決定的になにかが欠けていた。

探していた答えはそう簡単には見つからなかったが、そのうち写真家と呼ばれる人たちと知り合うことが増えた。写真家というと、決定的瞬間をするどく捕らえる狩人のようにアクティヴなイメージが浮かぶ。しかし実際に私が出会った人たちの多くは、むしろそのようなイメージとは裏腹に、ひっそりと暗い穴のなかに潜む異端の科学者あるいは詩人のようだった。彼らはいわゆる決定的瞬間からこぼれ落ちるような、人が気づくことのない小さな細部や偶然、目に見えない気配といったものに対して異様に敏感で、撮る人である以前に徹底して見る人でもあった。私は私には見えていないなにかを見ている彼らの眼が、ただただ怖かった。

彼らが手にしているカメラは、もともと一九世紀前半に発明された視覚装置である。人類はそれによって初めて自分の手を通さずに生まれるイメージを手に入れた。思考や感情をもたず、いっさいの有用性から離れたその装置は、すべてを残酷なまでに等しく写し出してしまう。自分の都合に合わせて世界を見ることに慣れている人間にとって、このようなまなざしは必ずしも都合の良いものではない。ときには邪魔ですらあった。写真家は、人間の眼とはまったく異質なこのもうひとつの眼を、⑤強引に飼いならすことも無造作に放り投げることもなく、ただ異質なものとしてそのまま抱えることを引き受けている。だから彼らは、この私と写真との間に人の気配のない場所が横たわっているという事実など、当然のように知っていた。

混乱はますます深まるばかりだった。写真家がはじめに見たいと願ったもの。実際にそのカメラが写し出したもの。そうやって写し出されたものを前にして、写真家が見つけたこと。見つけていないこと。その写真を前にして私が見出したこと、それでもやはりわからないこと。これらすべてがあたかも永遠に出会うことのない星のようで、その間には誰もいない空間が茫洋(ぼうよう)*2と広がっていた。私はいつも散り散りになったそれらの間をさまよいながら、こぼれ落ちる言葉を必死で拾い集めたが、言葉はいつまでたっても求めるものに追いつかなかった。ときにはそうすることに疲れてしまい、すこしばかり知ったような顔をして、すべてが自然に出会っているかのようにふるまうこともあった。そのたびに写真を都合よく利用した気がして、うっすらと苦い後味が残った。

写真について書けば書くほど、追いつかないということを認めるしかなかった。仮にそれを成し遂げたかのようにふるまうことができたとしても、もし写真について書くことがその程度のことでしかないならば、書くことはあまりにも空しい。その行為の途方もなさを前に心が折れかけることもあったが、そのたびに私を引き止めたのは写真家という存在、のっぴきならない強度をたたえた彼らの眼だった。

写真家はカメラという手に負えないもうひとつの眼を、ままならない現実のなかへ潜り込ませ、みずからの眼も滑り込ませて、⑥誰も見ていなかった世界の姿をイメージに結実させてしまう。そのありようは、たいてい多くの人が期待するものから遠く、その行為もほとんど報われることがない。しかし彼らがそうやって獲得したイメージのなかには、そうでなければけっして誰の目にも留まることのなかったであろう偶然や細部が無数に刻まれていた。それらの存在――撮った人の、撮られた人やものたちの、文字通りかけがえのない姿――には、圧倒的な尊さがある。どんなにもがいても私の言葉は到底そこへ届くことはなかったが、それならばせめてその尊さに向けて、恥知らずでない言葉をひとつでも紡ぎたいと、いつからかそれだけを願うようになった。

私がいまも書きつづける理由は、それ以外にはない。耳を澄ませば、かつて人の気配がないと思っていた⑦あの場所に、すべての人間の眼を素通りし、誰からも見られず語られることもない無数の生の気配がざわめいていた。私にはなにも見えていなかったのだ。写真を前にして、そこへひたすらに眼を凝らし、耳を澄ませて、終わりなく迷いながら言葉を探ってゆく。やがてほのかな思考の断片のようなものが、茫漠（ぼうばく）＊3と姿を現してくる。そうやって見ることと書くことの強度が、撮ることと撮られることの切実さに少しでも近づくことを願って、書く。もはや写真についてではない。ただ、写真のそばで。

（竹内万里子『写真のそばで』）

語注　＊1　訝しい　…　物事がはっきりしないことを怪しく思うさま。
＊2　茫洋　…　広々として限りのないさま。
＊3　茫漠　…　広々としてとりとめのないさま。

問一　――線部①「初めて会った人にどんな仕事をしているのかと尋ねられるたびに、いまだに口ごもってしまう」とありますが、その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　写真について書くという仕事をしていることが恥ずかしく、誤解を招きやすいので、できれば答えたくない質問だから。

イ　初めて会った相手だけに、お互い何も知らず、とてもナイーブな自分の仕事を説明するのはかなり難しかったから。

ウ　自分自身自分の仕事の本質をよくわかっておらず、初めての相手にうまく説明できるとは思っていなかったから。

エ　これまでの経験から、相手が自分の回答に対して不思議そうな顔をするのがわかっているので、できれば答えたくないから。

問二　――線部②「相手の表情がいくぶん緩む」とありますが、その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　写真は撮るものだと思っており、写真について書くと言われてもピンと来なかったが、研究すると聞いて少しはわかった気になったから。

イ　「私」の申し訳ない姿を見て、さらに研究するほうだという説明を受けて、「私」が警戒すべき人ではないことが少しは理解できたから。

ウ　写真について書くと言われただけでは怪しすぎるが、研究ということならさもありなんと思え、納得できたから。

エ　写真というものは撮るものであるという世間の常識からは逸脱しているが、研究なら書くこともあり得ると合点したから。

問三　――線部③「写真について自分で書くしかない」と思ったのはなぜか、本文中の語句を用いて五十字以内で説明しなさい。

問四　――線部④「私はもうすぐ辞めるから、その前に書きなさい」というのは筆者に書かせるための編集者の嘘（うそ）であったと考えられます。このような嘘を何というか、解答欄に合う形で漢字二字で答えなさい。

問五　――線部⑤「強引に飼いならすこと」とはどうすることか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　さまざまな撮影技術を駆使して、自分の表現したいものを写し出せるようにすること。

イ　カメラにさまざまな改良を加えて、自分が使いこなせるようにすること。

ウ　さまざまな部品をカメラに付け加えることで、誰にでも使えるようにすること。

エ　カメラのさまざまな機能を駆使して、自分が撮りたいものを撮れるようにすること。

問六　――線部⑥「誰も見ていなかった世界の姿」について具体的に説明している五十四字の部分の最初の五字を書きなさい。

問七　――線部⑦「あの場所」とはどこを指すか。本文中の言葉を用いて二十五字以内で述べなさい。

問八　本文の内容に合致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　人類がカメラという機械で手に入れられるイメージは、人間にとって思った通りのものをいくらでも複製でき、都合の良いものであった。

イ　写真について書けば書くほど、写真が撮った人や、撮られた人やものたちの、かけがえのない姿を表現しきれないことを実感させられた。

ウ　私が出会った写真家の多くは、科学者や詩人のように目に見えないものを徹底して見る人であったがゆえに、決定的瞬間をするどく捕らえた。

エ　写真を前にして、迷いながら言葉を探ってゆくが、もはや写真について書くことはなくなり、ただ、写真のそばで写真への思いを書くだけになった。

（解答用紙 その １）

令和５年度　入学試験　解答用紙　「国語」

京都共栄学園高等学校・進学コース

一

問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	
１					Ⅰ	C	A	E	A
	～								
２					Ⅱ		B	F	B
３					Ⅲ				C
４					Ⅳ				D

受験番号
氏名
採点

令和５年度　入学試験　解答用紙　「国語」

二								
問一	問二	問三			問四	問五	問六	問七		問八
					嘘も					

受験番号

氏名

令和５年度　入学試験　解答用紙　「国語」

京都共栄学園高等学校・進学コース

											一
8点	8点	8点		8点		6点	12点	4点	4点		12点
1	す	そ	職	ね	高	ア	Ⅰ	C	A	E	A
量的	べ	満	場	な	学		A	会	立	崩	検診
	て	足	で	い	歴						
	の	を	の	労	で						
	成	求	昇	働	一						
	～	め	進	を	流						
2							Ⅱ		B	F	B
質的	幸	る	に	強	企		A		出	阻	詰
	福	と	執	い	業						
	で	い	着	ら	に						
	あ	う	せ	れ	就						
	る	生	ず	る	職						
3		き	、	ケ	し		Ⅲ				C
質的		方	家	ー	て		B				勇
		。	庭	ス	も						
			で	。	、						
			の		過						
4			幸		労		Ⅳ				D
質的			福		死		A				潰
			に		し						
			こ		か						

受験番号
氏名
採点

令和５年度　入学試験　解答用紙　「国語」

京都共栄学園高等学校・進学コース

受験番号

氏名

二

3点	6点	4点	3点	2点	6点	3点	3点
イ	ない場所。	私と写真との間に横たわっている人の気配の	いわゆる決	ア	嘘も方便	なかったから。	ア	ウ

写真をどうみたらよいのかという疑問に対す
るかがえがかれている書籍や雑誌が見つから